

## 全国学力・学習状況調査 結果分析について

## ① 令和7年度の平均正答率の全国・府との比較

区分	6年生			9年生			
	教科	国語	算数	理科	国語	数学	理科(CBT)
大阪府比	同等	課題がある	同等	同等	同等	同等	
全国比	課題がある	課題がある	同等	同等	課題がある	課題がある	

## ② 平均正答率における全国との比較(過去10年)

区分	教科	R7	R6	R5	R4	R3	R2	H31	H30	H29	H28
前期課程	国語	課題がある	課題がある	課題がある	課題がある	課題がある	実施なし	同等	課題がある	課題がある	同等
	算数	課題がある	課題がある	課題がある	同等	課題がある		同等	課題がある	課題がある	課題がある
	理科	同等	—	—	課題がある	—		—	課題がある	—	—
後期課程	国語	同等	課題がある	同等	課題がある	同等		同等	同等	同等	同等
	数学	課題がある	課題がある	同等	課題がある	同等		課題がある	同等	同等	課題がある
	理科	課題がある	—	—	課題がある	—		—	同等	同等	同等
	英語	—	—	同等	—	—		同等	—	—	—

※平均正答率を比較して、+5ポイント未満は「同等」、5ポイント以上上回る場合は「上回る」、5ポイント以下下回る場合は「課題がある」と表記しました。

※H30以前は国語、算数・数学において、A問題(知識)とB問題(活用)に分けて実施していました。

## ③ 令和7年度 各教科の結果の分析およびまとめ

能勢町教育委員会および能勢ささゆり学園による分析内容を総合し、以下のようにまとめ、能勢の子どもたちの学力課題の克服に向けて、授業改善等を推進する。

## I 「獲得」と「定着」・「活用」から読み解く学力課題

令和6年度の分析で「獲得」と「定着」に関する課題について次のようにまとめている。

その授業の、その瞬間には「知識」や「技能」を獲得している子どもが多いのではないかと考えられる。ただし、「獲得」が「定着」につながらず、調査本番にはその力が発揮できていないという点、もしくは、「獲得」しているものを、必要な場面で「活用」できていない点こそが、克服すべき課題である

上記令和6年度のまとめを踏まえ、具体的な方策として、「活用」を意識した単元・授業の工夫および改善に向けた具体的な取組を検討、推進してきている。令和7年度の調査結果においても、引き続き同様の傾向が見られたものの、一部の調査問題の結果から、「活用」を意識した取組の工夫が「定着」につながっていることを見取ることができた。

9年生国語の「職場体験活動のお礼の手紙の推敲」に関する出題では、全国の平均正答率を上回っている。8年生の地域事業所インターンシップの学習の中で、事業所へのお礼の手紙を書く活動を、国語の学習内容と関連付けて行っている。手紙の書き方という国語科の「知識・技能」に関する学習内容について、「活用」できる場面を設けているケースであり、これが高い正答率につながったのであれば、「活用」を意識した取り組みが「定着」につながっていると考えられる。

一方で、昨年度同様に「定着」に関する課題は、引き続き見られている。

6年生の国語では、漢字の書きの問題として「暑い」が出題された。こちらは3年生の配当漢字である。能勢町では、2年生から4年生にかけて、全員が漢字検定を受検し、毎年、非常に高い合格率となっているが、本調査の正答率は、全国平均より10ポイント以上低い結果となっている。

9年生の数学においては、相対度数の基礎的な計算に関する問い合わせで全国平均を大きく下回っていたのに対し、平行四辺形の証明に関する問い合わせでは全国平均を上回る正答率となっていた。

これらのことから、昨年度と同様に、学習してから調査までの期間の長さが正答率に与える影響が強いという傾向があったと考えられる。

令和7年度においては、探究的な学びを授業等に取り入れていくために、全職員による研修の実施や、探究的な学びのプログラムを導入するなど、具体的な取組を始めているところである。「定着」の課題を克服するため、引き続き「活用」を意識した単元や授業の工夫および改善に取り組んでいく。

## II 問題文を読む力とスタミナに関する課題

問題文を読む力、資料や図表から必要な情報を探す力、またそのスタミナについて、令和7年度の調査結果から、令和6年度と同様の傾向が見られた。

6年生国語の、文章と図表を結び付けるなどして必要な情報を見つける問題では、選択肢の文言が「【資料1】の一線部①」といった形になっており、「一線部」の内容は問題冊子で4ページ遡って探す必要があった。全国の解答類型の傾向を見ると、誤答のパターンとして2を選んだ児童の割合が多かったのに対し、能勢町の解答状況をみると、正答の3や、誤答パターンの2を選んでいる児童の割合が府や全国を下回っているだけでなく、他の誤答のパターン(1, 4)を選んでいる児童の割合が府や全国よりも高くなっている、4つの選択肢へ満遍なく分散している。この結果から考えられる状況としては、解答する際に「一線部」の内容がどこに書かれているのか見つけられなかった児童の割合が、府や全国より高かったということである。

いずれの学年、教科においても、複数の資料を参照し、解答する必要がある問題は多く出題されているが、いずれの問題においても府や全国の平均正答率を下回っている。ページをまたいで資料を探さなければならぬ問題については、特に正答率が低くなっている。

このことから、解答する際に必要な資料を探し、情報を結び付けるなどするための読む力や、すぐに見つけられなかった時に粘り強く探したり、何度も読んだりするスタミナに関して課題があると考えられる。

こういった課題を解決するために、問題を解くために必要な「認知機能」に着目した。

「認知機能」とは、「記憶力」「言語能力」「判断力」「計算力」「遂行力」と5つの力に定義され、特に「言語能力」については、相手が話すことや書かれている文章を理解したり、自分の意思を文字や言葉にして伝えたりするために必要な力である。

こういった「認知機能」を高めるためのトレーニングを、低学年から積み上げることで、文章を読む力を底上げできればと考えている。

### 【参考問題】

9年生 数学

・相対度数の意味を理解しているかどうかをみる問題

5 下の表は、ある学級の生徒40人のハンドボール投げの記録をまとめた度数分布表です。

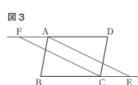
ハンドボール投げの記録	
階級(m)	度数(人)
以上 未満	
5 ~ 10	3
10 ~ 15	8
15 ~ 20	9
20 ~ 25	10
25 ~ 30	6
30 ~ 35	3
35 ~ 40	1
合計	40

20 m以上 25 m未満の階級の相対度数を求めなさい。

正答 0.25

・ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかをみる問題

(3) 次の図3のように、平行四辺形ABCDの辺BC, DAを延長した直線上に、BE = DFとなる直線E, Fをそれぞれとります。



このとき、四角形FCEAは平行四辺形になります。このことは、次のように証明できます。

#### 証明 2

平行四辺形の向かい合う辺は平行だから、  
AD // BC .....①  
よって、FA // CE .....②  
平行四辺形の向かい合う辺は等しいから、  
AD = BC .....③  
仮定より、  
DF = BE .....④  
②、③より、  
DF - AD = BE - BC .....⑤  
④より、  
FA = CE .....⑥  
①、⑤より、  
1組の向かい合う辺が平行でその長さが等しいから、  
四角形FCEAは平行四辺形である。

さらに、次の図4のように、辺ABと線分FCの交点をG、辺DCと線分AEの交点をHとすると、四角形AGCHは平行四辺形になります。

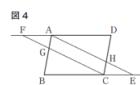


図4において、四角形AGCHは平行四辺形になることは、2組の向かい合う辺がそれぞれ平行であることを示すことで証明できます。四角形AGCHが平行四辺形になることを証明しなさい。ただし、四角形FCEAが平行四辺形であることはすでにわなっていることとします。

「平行四辺形の証明」は8年生の学習内容

解説例

説明 (例) 平行四辺形ABCDの向かい合う辺は平行であるから、  
AB // DC .....①  
よって、AG // HC .....②  
平行四辺形FCEAの向かい合う辺は平行であるから、  
FC // AE .....③  
よって、GC // AH .....④  
①、②より、2組の向かい合う辺がそれぞれ平行であるから、  
四角形AGCHは平行四辺形である。

## ④ 令和7年度 児童生徒質問紙調査の結果から

### I CBTへの対応とICTの活用に関する課題

令和7年度調査では、後期課程の理科がCBTでの実施となった。令和8年度においては英語科がCBTで実施され、令和9年度からはすべての教科がCBTによる実施となる。GIGA2期における児童生徒用の1人1台端末が更新され、より一層のICTの効果的な活用が期待されている。

令和6年度の調査では、児童・生徒質問紙の「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」という質問において、6年生、9年生ともに「週1回以上使用している」と解答した児童生徒の割合は、全国よりも高かったが、令和7年度においては、6年生、9年生ともに府・全国を下回っている。

この結果から学年等により、使用頻度に差があるという課題が見えてきた。

また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という探究的な学びに関する質問では、肯定的回答の割合が令和6年度に比べ低下している。探究的な学びを進める中で、情報収集や発表場面等、ICT機器の活用は、不可欠であることからも、ICT機器の活用頻度が探究的な学びに関する質問の回答結果と、連動していると考えられる。

さらに、「算数(数学)の勉強は好きですか」という項目において、全国平均を下回り、昨年度と比較しても低下している。算数・数学において一つ一つの授業で知識・技能の「獲得」に向けて、問題演習、反復学習等に時間を割いており、探究的な学びを軸とした単元構成の組みやすい国語や理科と比較し、「算数(数学)が好き」という回答には結びつきづらかったと考えられる。また、問題演習、反復学習において、より多くの数をこなすには、認知負荷的な観点から、デジタルよりもアナログの方が効率良く取り組める場合もある。こういった点から、ICTの活用場面の減少につながっていると考えられる。

学校以外での学習時間についても引き続き課題が見られる。特に9年生においては、全国・府と比べて開きが見られる。学校外での学習時間の充実に向けて、デジタルドリルの積極的な活用が期待されるところであるが、ICT機器の活用頻度の低下と併せて、家庭学習の時間も短くなっている。

このように、子どもたちの学びの充実を図る上で、ICTの日常的、効果的な活用は、他の様々な要因とも関わっていると考えられる。ICT機器を使うことが目的になってしまわないよう気を付けながらも、GIGA2期での端末の入れ替えや、それに伴うICT機器が効果的に使える環境の整備・充実を進めていく。また、教員がICT機器を使いこなすためのスキルを高める研修等についても実施していく。

後期課程における生成AIの活用や、教員の業務を効率化させるための様々なツールが次々とリリースされる中で、デジタル化の波に取り残されないように、組織的な取り組みとしてICTの利活用を推進していく。

#### 【主な質問項目の全国や前年度との比較】

